

書物の自由と尊厳の ために

『Ta,Da,Ça -un texte amoureux-』 第三版

自著解題 千慶烏子 2011年7月20日

本書『Ta,Da,Ça -un texte amoureux-』は2000年に千慶烏子(Callas Cenquei)によって執筆・制作され、2001年にダウンロード版が、2003年にCD版がP.P.Content Corp.社より発行されました。映像と音響のより高い芸術表現の達成を目標に2006年第三版が計画されましたが、千慶烏子の緊急入院と病氣療養のため制作を一時中断し、その回復を待って本年2011年に第三版が完成されました。本書『Ta,Da,Ça』は世界で初めて紙を持たない形式で著された書物であり、その先駆性と革新性において、また他に例を見ないその独創性において、そして何よりも比類のない高い芸術性において、フランスをはじめ、アメリカ・ドイツ・イタリアと海外から高い賞賛が寄せられ、各国で翻訳が続けられています。

しかしながら、世界に先駆けて行われたこの先駆的作品に対し、我が国ではひとつの不寛容な否定がその前に立ちはだかります——それは「書物」ではない。この簡潔にして単純な否定の命題のもとで、世界で初めて発行された紙を持たない書物は、我が国では「存在しなかった」ことにされてしまいます。その歴史的意義も、ヨーロッパを驚嘆させた詩人の独創も、その比類なき芸術的達成も、また本書を端緒に切り拓かれるであろう「新しい書物」の未来も、すべてその存在と可能性を抹消されてしまうのです。ここには世紀を隔てる歴史的な断絶があります。しかしそれだけでなく、この否定の命題の根底には、二十世紀的蛮行から数十年を経てなお我が国の知性に連綿と受け継がれる排除と抑圧の思考が横たわっています——あなたは「わたしたち」ではない。ここで千慶の詩的営為は大きな転換を示します。この単純にして簡潔な否定の命題を一身に引き受け、計り知れない受難と抑圧のなかでさらに前進、さらなる前方へと、前人未踏の領域に表現と方法を進めてゆくことになるのです。

我が国の詩的メディアに千慶の名前が記されることがなくなった本書以降が詩人千慶烏子の本当の仕事だと言えるでしょう。書物はすべて紙を持たない形式で著わされ、映像・音響・デザインと高度に達成された芸術表現をもって構成され、すべてP.P.Content Corp.社より発行されます。これらの書物を通して読者はそこに何を見るのでしょうか。人跡未踏の土地なき土地に杭を打ち、礎を築こうとする孤独な先行者の姿を見るのでしょうか。それとも帰還すべき故郷を失い、遙かな望郷の思いとともに植物の育たない荒地を彷徨する流謫者の姿を見るのでしょうか。あるいは、旧弊で老獪な制度的知性という怪物に「書物」という石礫をもって対峙する果敢な抵抗者の姿を見るのでしょうか。それとも隊伍を離れ、退路を断たれ、道なき道をひとり流浪する落伍した兵隊の姿を見るのでしょうか。真の詩的営為とは、そして芸術的創造とはかくも凄惨であり、かくも気高い行程を歩むものだということを、読者はこれらの書物を通してあらためて知ることになるでしょう。こうして、紙

を持たない千慶の書物は、その高度に達成された次世代の芸術表現という様相のかたわら、迫害を堪え忍ぶ受難者が紙の切れ端にしたための未来に向けての証言と遺言、もしくは宝物の在り処を印した地図のごとき様相を呈するようになります。そこには驚くべき予見があり、未来に向けての確信があり、確かな希望と見渡すべきはるかな地平があり、自ら受けることになった受難に対する尽きない嗟嘆があり、度重なる回心と悔い改めがあり、それにもかかわらず自ら選び取った運命に対する傲然たる自負があり、要するにそこには詩的要件を満たすすべてがあります。

詩人の仕事とは何かという問いに対して、千慶は次のように答えています。詩人の仕事は未来に向けて「火」を運ぶ仕事であり、書物はこの火を暖める「灰」に他ならないのです、と。読者はこの初版から十年を経過した初世代の開拓者の書物に、いまだ赤々と燃えさかる燠の火を見るでしょう。時には遠く沖合いをさまよう人を導く灯火となり、道なき道を歩む人の足元を照らす明かりとなり、孤独に慄える人を勇気づけ、温める言葉の力を読者はそこに見いだすでしょう。この火を暖める「灰」が紙で出来ていることと、紙を持たないことの差はどこにあるのでしょうか。肌の色ほどの違いもなく、言語や信仰ほどの違いもなく、民族と宗教ほどの違いもなく、人類が乗り越え獲得してきた数々の差異と多様性をわれわれが乗り越えることができなかったとするならば、それはこの「火」を運ぶべき未来に対する罪だと言わねばなりません。それともわれわれはまたしても、あなたは「わたしたち」ではないという命題のもとで、未来に運ぶべき「火」を消し去ってしまうのでしょうか。

初版発行からすでに十年を経過し、第三版となった書物を今あらためて発行することの意義はどこにあるのでしょうか。長い年月を費やしたその芸術的な達成を披露することに目的があるのでしょうか。それとも一人の詩人の行程を紐解くことにその意義があるのでしょうか。いいえ、そのいずれでもなく、本書の歴史的意義は、書物というものがいかに気高く、自由と尊厳に満ちたものであるのかについて、書物をもって証言することにあるのです。本書が表明しているのは、いかなる困難な状況に置かれようともわれわれは書物を著すことができるのであり、資本やメディアの協力が一切望めない孤立した状況下においてもわれわれは書物を公けにすることができるのであり、いかなるシステムや制度がその通行を阻害しようともわれわれの書物は断固として自由であり、国家的災厄の傷跡が生々しいこの今このときにおいてさえわれわれの書物はかくも気高く尊厳に満ちており、今後いかにテクノロジーが進化し、いかなる新しい表現媒体が登場しようとも、そこに言葉を表現することができるかぎりにおいて、われわれはこれら新しいメディアに対して「新しい書物」を創造する自由と権利を、さらには未来に向けてその使命を有しているのだ、ということになるでしょう。われわれはテクノロジーの進化とシステムの転換によって書物の新しい段階に達するわけではありません。書物の自由と尊厳において「新しい書物」を自らの手に勝ち得るのです。本書を紐解き、読み終えた読者は次のように語りかける詩人の言葉を耳にするにちがいありません。——さらに前へ。さらなる遠方へ。われわれの「火」を届けるのですと。